慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ルネサンス期の文学と視覚芸術』 (『カイエ・ソーニエ』第38号)
Sub Title	Littérature et arts visuels à la Renaissance, (Cahiers V.L. Saulnier, no38), sous la direction de Luisa Capodieci, Paul-Victor Desarbres, Adeline Desbois-Ientile et Adeline Lionetto, Paris, Sorbonne Université Presses, 2021.
Author	岩下, 綾(Iwashita, Aya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.28- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集 書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

【書評】

『ルネサンス期の文学と視覚芸術』
（『カイエ・ソーニエ』第38号）

岩下　綾

本書は、パリ・ソルボンヌ大学所属ソーニエ協会発行の『カイエ・ソーニエ』第３８号であり、２０２０年３月に開催されたソーニエ学会の発表をもとに編纂された論集である[i]。フランス１６世紀文学研究の歴史に鑑みると、文学と他芸術との関係を問う研究は多くはなかった。本書の編集者たちが指摘するように、ごく少数の例外を除いて文学史の中の個別例の分析に留まり、芸術家の活動には深く関与しない研究がほとんどを占めていた[ii]。2010年代に入って、こうした研究動向に変化が起きる。変化の一端を担うのがソーニエ学会で、同学会はこの１０年、積極的に学際的な会合を開き、主に詩と音楽との関係を取り扱ってきた。その延長線上で、２０２０年の学会では文学と視覚芸術との関係へとテーマが広げられ、文学研究者と美術史研究者たちが、１６世紀フランスの文筆家と芸術家の間に展開された多様な関係性を巡って研究発表を行なった。その成果が本書にまとめられている。

本書は四部に分けられ、それぞれの部が３～４本のフランス語による研究論文で構成されている。「芸術と芸術家　文筆家の見地から（Arts et Artistes au regard des écrivains）」と題された第一部では、文字通り、文筆家側の芸術・芸術家に関する知識と、作品への応用、が論じられる。Adrian Armstrongは、ブルゴーニュ公国の宮廷詩人、年代記作者であるジャン・モリネが参加したとされる「モンペリエの羊皮紙」の図像が、モリネにおける視覚的なものの役割を統合するものであるとして、彼の諸作品の図像化・舞台化可能性を分析する（« Jean Molinet et le visuel »）。年代記作者としてモリネの跡を継いだルメール・ド・ベルジュ作品に関して、Adeline Desbois-Ientileは、彼と芸術家たちの交流に基づき、同時代

の芸術と芸術家がテキスト内で占める地位を特定することで、特に活動初期、マルグリット・ドートリッシュに仕えた時代にあり得たであろう作家の野心を描き出す（« Lemaire de Belges, artiste en prose et en vers »）。Jean Balsamoは、１６世紀後半から１７世紀初頭にかけて、フランスの文人の間に同時代の絵画を評価する意識の革新があったとし、イタリア旅行紀という当時発展したジャンルに事例を示しながらそれを証明する（« L'expérience du voyage d'Italie et l'initiation des Français à la peinture (1550-1620) »。レオナルド・ダ・ヴィンチの『絵画論』で論じられる視覚優位性には、フランス宮廷の影響があったとする論考をこれまで発表してきたCarmelo Occhipintiは、フランソワ一世の宮廷がしばしば登場するブラントーム『好色女傑伝』を対象に、その論考を図像学および文体論の面から再考する（« Brantôme et les arts figuratifs »）。

第二部「芸術の収斂　文筆家と芸術家の共同作業（Convergence des arts, collaborations entre écrivains et artistes）」では、文筆家や画家、建築家の影響が作品に収斂されていく際の作品の生成過程が明らかにされる。Frédérique Lemerleは、ジャック・アンドルーエ・デュ・セルソーが実見したことのないガロ＝ロマンとローマの遺跡を描く際に参照した出典を、古銭蒐集家のギヨーム・デュ・シュルに求めるという説を、それぞれの伝記的事実を詳細に検討した上で検証する（« Du Choul et Androuet du Cerceau : une collaboration fructueuse ? »）。Paul-Victor Desarbresは、ポンテュス・ド・ティヤールによると考えられていたアネ城のための一連のタペストリーの構想について、神話の選択、１０行詩、図像、ラテン語の格言から、ジャック・ド・ヴァンティミルの関与の可能性を探る（« Jacques de Vintimille et Anet : à l'origine de la tenture de l'Histoire de Diane »）。Richard Cooperは、1500年以降に詩篇集へ図像が付されなくなるとするMyra Orthの説を出発点とし、フランソワ一世、アンリ二世統治下の写本と印刷本を挙げて、１６世紀にも図像が付された詩篇集が存在することを明らかにする（« Illustrer les psaumes en France (1500-1560) »）。Yves Pauwelsは、文学と建築の双方において重要な出版が相次いだ1549年周辺の出来事に関して、プレイヤッド派とそれに相応する建築家を対比しながら、両分野がフランス独自の様式を獲得していく過程を明らかにする（« 1549 : confluence des lettres et de l'architecture »）。

第三部「テキストとイメージ：記号間装置（Texte et image : dispositifs inter-

sémiotiques)」において検討されるのは、テキストとイメージが密接に絡み、それぞれがそれぞれの一部をなすタイプの複雑な装置を持つ作品である。Émeline Sallé de Chouの論文では、ルイーズ・ド・サヴォアが二人の子どもと自分のためにフランソワ・デムランに依頼した『出生天宮図の周期』において、図像がエラスムスの『格言集』と結びつけられて、予言の理性的な読解が推奨される様相が解明される（« François Demoulins et Érasme, astrologie moralisée pour Louise de Savoie »）。Emmanuelle Héninは、イタリアから伝播したエンブレム流行の最盛期に、エティエンヌ・ジョデルが図像学および修辞学の紋切り型を*Le Recueil des inscriptions*（1558）に集め、ブリコラージュ的に同化させる様相を分析する（« Jodelle inventeur d'emblèmes dans *Le Recueil des inscriptions de 1558* »）。Estelle Leutratは、詩人であり、戯曲家、陶芸家でもあるジャック・ド・フォントニの活動のうち、版画製作販売業者らとの交際の様相をとりわけ瓦版等から解読する（« "Concevoir en papier fruicts dignes de mémoire". Jacques de Fonteny et le placard illustré »）。Lisa Pochmalickiは、都市の図像を取り上げ、文学地理学の観点から作品のテクストと図像の修辞学的な解読を試みる（« "Quasi à veuë d'œil" : circulation de cartes et vues de villes lointaines dans la bibliothèque géographique »）。

最後の第四部で「形式の互換と適合（Transposition et appropriation des formes）」のタイトルのもとに展開されるのは、文筆家と芸術家との人的関係を背景にして、同時代の視覚芸術の一形式がどのように文学作品に転換されるのか、またその反対のケースを扱った論考である。Blandine Peronaは、トマス・モア『ユートピア』における風刺と「隠されたイメージ」との結びつきを特定したのち、アグリッパ・ドービニエ『悲愴曲』およびフランソワ・ベロアルド・ド・ヴェルヴィル『出世の道』における「二重のイメージ」の歴史的役割を見極め、アナモルフォーズ文学における風刺の使用法を明らかにする（« Images cachées et satire. D'Érasme et Thomas More à Agrippa d'Aubigné et François Béroalde de Verville »）。Nicolas Cordonは、フランソワ一世統治後期に作られた３つの作品（クレマン・マロ「美しい乳房のブラゾン」、フォンテーヌブロー城エタンプ公爵夫人の寝室装飾、ベルヴェデーレのウェヌスのブロンズ複製）のアフロディーテ的な実効性を、象徴的および形式的側面から考察する（« Un décor aphrodisiaque. La Chambre de la duchesse d'Étampes à Fontainebleau, l'*Aphrodite de Cnide* et les blasons anatomiques du corps féminin »）。Valérie Auclairは、出資者としてまた著者とし

て、パリの薬剤師ニコラ・ウエルが制作した『アルテミーズ王妃の物語』において、ソネや素描の実制作者を同定しながら、ウエルによる「invention」という語の使用を分析する（« Inventer une reine. Lettrés et artistes dans l'*Histoire de la royne Arthemise de l'invention de Nicolas Houel* »）。

本論集がこれまでの学際研究と異なるのは、人的関係に重点を置いて文学と視覚芸術との関わりを分析するという点にある。直接的にイメージとテキストを結びつけるような対象、すなわち本の中のイメージ（細密画など）、視覚芸術の中のテキスト（絵画の中に織り込まれた文章）、さらには「エクフラシス」のような視覚芸術作品のテキスト描写の分析のみに留まるのではなく、文筆家と芸術家との間の人的関係を問う、より社会学的なアプローチを行うことが本書における学際研究の大きな発展である。研究対象がフランスの作品に限られるが、対象分野の枠が広がっている分、地域を限定することで、一定のまとまりを保つための調整がなされている。

芸術家と文筆家が交流を持ち、同じ宮廷や同じメセナの元で活動する、といった交際領域の輪郭を描くという試みも、ほぼ全ての論文において実践され、実際的な共同作業というシンプルな関係から、結びつけられた作品同士の記号論的な関係性まで、文筆家と芸術家とのさまざまな相互作用を描き出すことに成功している。各論が自ずと対象の作家・作品についての伝記的な記述を行い、諸分野間の人的な繋がりを緩やかに描くため、俯瞰的な歴史理解が可能になる。いくつかの論文でも言及されているが、この交流図に、庇護者や権力者が含まれるとフランス・ルネサンス期の芸術活動のさらに大きな枠組みが見えてくるだろう。また、副次的なことで近年の他の文学研究論文集にもしばしば見られるが、印刷技術の進展により価格と重量は従来のままカラー図版が多数掲載されているのは喜ばしい。

複雑な人的ネットワークを背景にした文筆家と芸術家との共同作業を紐解くにあたっては、研究者の側にも学際的な連携が必要となる。ルネサンス期のような分野横断的な影響関係、協働関係を反映しながら、学際的な研究者ネットワークを構築し、またコロナ禍で加速度的に利用が進んだオンラインの技術を活用しつつ、フランス以外の国々をも巻き込んで、学際研究のネットワークが拡大されていくことが望まれる。

註

i *Littérature et arts visuels à la Renaissance*, (*Cahiers V. L. Saulnier*, nº 38), sous la direction de Luisa Capodieci, Paul-Victor Desarbres, Adeline Desbois-Ientile et Adeline Lionetto, Paris, Sorbonne Université Presses, 2021.

ii 例外としては、王の入市式や祝祭を扱った研究論集が1950年代から何度か出版されており（Jean Jacuot (dir.), *Les Fêtes de la Renaissance*, Paris, Éditions du CNRS, 1956等）、他にも本論集に寄稿しているJean Balsamo、Richard Cooperに加え、Jean GuillaumeやGilles Polizziらがテキストと視覚芸術を扱った研究を継続的に発表している。